

2020 年度 鳥の劇場運営委員会補助金事業

2020 年度「トリジユク」報告

「トリジユク」の研究開発事業に着手して4年目。2020年度は、鳥取市立鹿野学園「表鷺科」・鳥取県立青谷高校「地域環境芸術コース」に加え、長年学習発表会支援として関わってきた鳥取市立逢坂小学校でも「トリジユク」として初めて実施した。3校とも鳥の劇場との関わりが継続できているため、子どもたちの資質・能力の発見定着を目指し、教員とアーティストがそれぞれ専門的な立場からの“看取り”を共有しながら連携して実施できた。鹿野学園での実践を核に、ブラッシュアップし続け深めていくと同時に、他校からのワークショップや講演依頼も引き受け、面としても少しずつ広げていった。（下記に記述）

*「トリジユク」は、鳥の劇場が実施する、演劇を使った「芸術表現体験活動と省察活動による教育プログラム」（青山学院大学学習コミュニティデザイン研究所による開発）のことである。

今年度は一部のトリジユクを、文化庁「令和2年度文化芸術による子供育成総合事業—コミュニケーション能力向上事業—」（★）として行った。そのねらいは、学校と芸術家をつなぐ「コーディネート」の意義を改めて捉え直し機能させることにある。芸術表現体験活動には様々な分野がある中、鳥の劇場は【演劇】に特化し、伝え合い認め合いながら合意形成・課題解決に向かう〈言語的〉コミュニケーション能力を育成している。一方、鳥の劇場によるワークショップに慣れた学校を対象に、【ダンス】【メディア芸術】などの〈非言語的〉コミュニケーションが要となるワークショップをコーディネートすることにより、より多角的に児童生徒を看取っていくことができた。

以上のように、核となる対象校での継続を支えとして、他分野の芸術家や教育委員会等との連携を通じて、取り組みを広げることができた。

今年度のトリジユクの広がりとして、

- ・6/13（土） 鳥取市立瑞穂小学校 PTA 講演会「トリジユク実践について（WS 体験と解説）」
- ・10/21（水） 鳥取市立津ノ井小学校修学旅行受け入れ「上演と WS」
- ・10/2（金）6（火）19（月） 三朝町立三朝中学校人権劇（映画）づくりの支援
- ・12/9（水） 子育て支援センター・カンガルー「絵本をお芝居にする WS」

が挙げられ、このうち来年度も行なって欲しいという要望がすでにあり、日程を調整している。

■【2020 年度実施数】

・鹿野学園＝116 時数（1 ユニットは、2 校時×2 日）

1 年生 1 校時×8 日

2 年生 1 校時×8 日

3 年生 3 ユニット

4 年生 6 ユニット ※うち4 ユニット（【ダンス】【メディア芸術】）が文化庁事業★

5 年生 4 ユニット

6 年生 3 ユニット

7 年生 5 ユニット ※うち3 ユニット（【ダンス】【メディア芸術】）が文化庁事業★

8 年生 2 ユニット

9 年生 2 ユニット

・青谷高校＝20 時数

3 年「地域環境芸術」コース生 2 校時×10 日 ※うち3 日分（教員専科【美術】【書道】との連携授業）が文化庁事業★

・逢坂小学校＝5 時数

5・6 年 1 校時×3 日、2 校時×1 日 ※すべて文化庁事業★

■【各校ごとの報告】

○鹿野学園

〈1年生〉メイン講師＝中垣・後藤

18人と少なめなこともあり、落ち着いた空気でワークショップスタート。6月は「あしじゃんけん」「あいさつさんぽ」などで心と体をほぐし、「しつもんリレー」で楽しみながら話をきく&受けこたえの練習。7月は「とりげきニンジャ」を出動させ、おもしろい動きをやってみることに、それを見て考えたり感じたりすることを組み込んだ。

12月は、思い出してもらうために前回と同じくジェスチャーゲームを中心に行ったところ、恥ずかしがってできない子もいたが、全体的には前回よりも楽しめていた。ジェスチャーは上手だが、見ている子どもが当てられずに、ジェスチャーしている子のやる気が削がれてしまう場面もあった。一人ではジェスチャーできない子は、友達や大人といっしょだとやれていた。

1月は、「しゅりけんがえし」で反応することを楽しみながら極めていった。「よげんカード」では、書かれた指示を見て、ジェスチャーで反応していく。1年生の最後は「おはなしリレー」とし、グループについている大人の1日を勝手に想像して言葉をつないでいき、奇想天外なお話をつくることができた。

年間を通じて先生と連携がしやすく、「ふりかえりシート」の設問は、毎回子どもたちの発達段階に応じて先生からのリクエストがあったことから、活動を通して学んでいく授業づくりを意識されていた。先生が率先して見本を演じてくれることも子どもたちの安心につながり、自分がやる楽しさだけでなく、人のことを見たり聞いたりすることもだんだん楽しめていく様子が見られた。

2年生では同じ内容を難易度調整して行う。引き続き先生と連携し子どもたちを看取っていききたい。

2020/6/15	演劇 WS「しつもんリレー」
2020/6/16	振り返りビデオ+プチ省察+「みんなでしつもんリレー」
2020/7/13	演劇 WS「とりげきにんじゃ参上！」
2020/7/14	振り返りビデオ+プチ省察+「にんじゃ学校ふたたび」
2020/12/21	演劇 WS「ジェスチャーゲーム」
2020/12/22	振り返りビデオ+プチ省察+「ジェスチャーゲーム」
2021/1/18	演劇 WS「にんじゃ学校（よくきいて反応する）」
2021/1/19	振り返りビデオ+プチ省察+「にんじゃ学校」



〈2年生〉メイン講師＝中垣・後藤

6月は、1年生の時にやったことも思い出してもらいつつできればと、「あいさつさんぽ」でスタート。「はくしゅまわし」「わたし-あなた」と演劇ゲームを重ね、集中して楽しく活動していく。

7月は日常の中にある動作のジェスチャー。2日目は発展させて、設定したキャラクターになりきって、ジェスチャーをする。「しゅりけんがえし」はイメージがつかみやすいのか、投げる・受けるバリエーション豊かだった。

12月は、前回と同じ「ジェスチャーゲーム」でお手並み拝見。やり慣れているのか、ゲームをどんどん楽しんでくれ、ただ楽しくなり過ぎておさまらない所もあった。自分でジェスチャーのお題を考える場面では、問題を思いつく速さにばらつきが生じるが、グループそれぞれに待つことができていた。2日目は「なつてみたいもの」と難易度が上がり、マニアックな出題を出す個性も見られた。

2年生最後の1月は、1年生と同じ「おはなしリレー」だが、昔話風にするという要素を加えて「○○の伝説」として、伝説の生き物について思いついた言葉をつなげていき、お話をつくっていった。

1、2年生でくりかえしてきた「楽しむ」体験。1年生では難しかったことができるようになったり、表現の工夫がでてきたり、それぞれに得意なことや苦手なことがちがったり、継続して関わっているからこそ子どもたちの変化に気づくことができた。自我が芽生えてくる3年生ではジャンプアップするような内容に移行していくが、引き続き先生と連携しながら、子どもたちの良さや新たな一面を発見していきたい。

2020/6/15	演劇 WS 「インタビューリレー」
2020/6/16	振り返りビデオ+プチ省察+「みんなでインタビューリレー」
2020/7/13	演劇 WS 「にんじゃ学校」
2020/7/14	振り返りビデオ+プチ省察+「にんじゃ学校ふたたび」
2020/12/21	演劇 WS 「ジェスチャーゲーム」
2020/12/22	振り返りビデオ+プチ省察+「ジェスチャーゲーム」
2021/1/18	演劇 WS 「にんじゃ学校（よくきいて反応する）」
2021/1/19	振り返りビデオ+プチ省察+「にんじゃ学校」



〈3年生〉メイン講師＝中垣・後藤

3年生では少しずつグループワークに挑戦していく学年。初回の6月は、一人一人の特性がグループに反映されて、「意見を決めるとき仕切る人の許しがなんとなく必要」「意見が合わない決めグループ内で分裂」「話し合いはできたけど発表が恥ずかしい」「グループ内の意見を聞き合って手本のような話し合い」と、主張が強い弱い関わらず、遠慮ないグループワークになっていた。

12月は、久しぶりの表現ワークショップに元気が炸裂してしまい、グループから離れて遊びに行ってしまう人もおり、グループワークでの話し合いになったところもあれば、ならなかったところも。承認欲求がすさまじい状態だったので、2日目は予定を変更し、演劇ゲームでもりもり楽しむことに。ランチルームを一杯使った「擬態かくれんぼ」や「だるまさんの日常」で盛り上がり、「みんなでやると楽しい」という感覚を味わってもらった。

1月も「クラス活動を楽しむ」ことを目標に演劇ゲームを展開。「へんしんおに」では、つかまりかける度に何かのふりをしていくだけの、見た目は不思議なおにごっこだが、意外にも大盛り上がり。蛇になって襲う人、種になる人はみつきりかける度に少し成長している！など。途中、「ずっと何かになってるのはいいの？」と質問がでて、〈なるのは5秒間〉というルールが足され、自分たちでもっと楽しむための工夫も見られた。「わがままゲーム」は、「～だったらいいのになあ」と一人が願いを言い、他の人がものになったりしてその願いを叶え、叶ったら「ありがとうございます。」と言う。遊園地の乗り物になったり、パリに行きたい子の飛行機や凱旋門になったり、保健室に行きたい子のベットや保健室の先生になったり。みんなに叶えてもらう嬉しい経験や、さいごにありがとうと言えたりする点が雰囲気良くしていた。最後にグループワークで、場面ジェスチャークイズ「ここはどこゲーム」。グループでお題を考え、ある場面をジェスチャーで見せ、他のグループはなんの場面かを4択で当てていく。グループで関わり合い納得解をつくっていく様子が見られた。なりきりっぱなしの2日間を概ねやりきってくれた。

6月以来、12月の学級の変貌ぶりに驚いたが、目の前の子どもたちと向き合い、学級の状態に応じて、ワークとゲームの使い分けや組み替えを行うことができた。ユニットを最小限にしてテンポをあげる、最初に楽しみ方をつたえる工夫、お題を真ん中におくなどアプローチの仕方を考えるなど、ファシリテーターとして見つけた今回の手応えや課題を、次につなげ応用していきたい。

2020/6/18	演劇 WS 「むかしぱなしメンバーチェンジ！」
2020/6/19	振り返りビデオ+省察+発表
2020/12/14	演劇 WS 「はかせの大発明！」
2020/12/15	振り返りビデオ+省察+発表
2021/1/12	演劇 WS 「わがままゲーム！」
2021/1/13	振り返りビデオ+省察+発表



〈4年生〉メイン講師＝中島（演劇）／藤田善宏（ダンス★）／望月玲奈（メディア芸術★）
重点学年。演劇、ダンス、メディア芸術の、3種類の表現ワークショップを2回ずつ行う。

5月の省察回を校内研究授業に位置付けられ、鳥の劇場メンバーもグループ討議に参加し、活発な意見交換を行うことができた。学校との連携がさらに深まっている。4年前の表驚科構想時から連携してきた担任の先生が、6月に産休で交代されたが、ブロック長の先生が橋渡しをしてくださり、新しい先生との連携もスムーズに進められている。

3年生までは、体を動かすこと、発散することに主眼を置いたワークショップであった。演劇ワークショップとしては、5月は初めての創造的グループワークで、やり方がわからない児童も少なくなかったように思う。6月から新しい先生に交代されたが、先生が一人一人をよく見ておられ、かなり気を使って班分けをされた。話し合い活動が活発化したのは、まずは大きな成功だったが、一方で、実際の練習時間が短くなる、発表時間が長くなるなどの課題を、今後工夫していきたい。

9月以降は、ダンスとメディア表現の〈非言語的〉コミュニケーションWSを重ねる。

「おとなしい（意見を出す子の固定化）」という学級の課題があったが、1回目のダンスWSで、普段の様子を知っている教員たちが驚くほど、全員が思い切り体を動かし、発言できていた。ワークショップ前後の教員と講師の打ち合わせにより、教員は翌日の省察の授業を、ねらいをもって組み立てることができた。子ども達は、ワークショップと翌日の省察を通して、「なぜ楽しめたか」を考え、自分たちの良さを意識化していった。後日、他教科での学びと連携させたダンスの続きをクラスでつくりあげ、文化祭で「社会科と表驚科を合体！鳥取・鹿野ダンスでGO！」として発表した。

「一人一人が大切なメンバー」という学級経営目標が定着し、クラスの中で共有される価値感が統一されていった。自分の意見を言うこと、自分の中のものを出すことにためらいがなくなっていき、グループワークの作品づくりでも、互いを認め合い、自分たちで進めていた。新しいアプリに対しても、前向きな姿勢、くいつきがよかった。4年生の間に培われたこの土壌を、5年生になってからの演劇WSで存分に活用していく。

これからも、アーティストとの出会いが、普段の学校生活にもいいイメージでつながるようなコーディネートを中心けていきたい。



2020/5/26	演劇WS「穴あき台本～暑い暑いさばくで～」
2020/5/27	振り返りビデオ+省察+発表
2020/7/6	演劇WS「心の〈力〉をみつけよう」
2020/7/7	振り返りビデオ+省察+発表
2020/9/29	ダンスWS★「オリジナルダンスをつくってみよう！」
2020/9/30	振り返りビデオ+省察+発表
2020/11/5	ダンスWS★「オリジナルダンスをつくってみよう！②」
2020/11/6	振り返りビデオ+省察+もっとやってみる
2020/12/2	メディア表現WS★「逆転時間」
2020/12/3	振り返りビデオ+省察+もっとやってみる
2020/12/14	メディア表現WS★「ドリコマ」
2020/12/15	振り返りビデオ+省察+もっとやってみる



〈5年生〉メイン講師＝中島・大川

5年生という学年は、5－4制の鹿野学園において、初等中等ブロックの最高学年。それまでの蓄積を踏まえ、どのように定着・発展させて高等ブロックにつないでいけるかが年間を通じた課題である。

6月初回は、思春期前期に入り、自意識・自己の殻が少しずつ生まれてきている段階でもあるので、グループ表現が一見硬い部分もあった。2回目は、初回と比べ、消極的なお子さんが少なくなった、というかほぼすべての子どもが創作の中で機能することができていた。写真班で動いてもらった子が多角的に関わってくれたことも、全体の熱を上げたのかもしれない。

12月2月は、新しい取り組み。各国の同世代の子の絵を見てもらい、そこから何を感じるか、何を想像するか、その丁寧な受け入れと言語化に力点を置いてみる。いつものにぎやかなWSとは異なる雰囲気、初めは戸惑いも見られたが、それぞれによく想像して、じっくりと考えることをやってくれたと思う。書き込んだ付箋や、質問と答えの紙、リフレクションシートを読むと、それがよくわかる。美術教育の中で注目されている対話型鑑賞よりも、より自ら見つけたディテールに感情移入をして表現をしていくワークとして、演劇というアプローチの可能性を示すことができるよう育てていきたい。

5年生最後の回は、毎年ビデオ作品づくりを行なっている。今回は全員分35作品づくりに挑戦。1人1人がイメージを持ち、主役兼監督の立場で振る舞い、周囲の人がそれをサポートする。これを繰り返しすることでリードやフォローのコツを感じてもらおう。どのグループも楽しみながら活動できていた。循環的な構造で子どもたちに徐々に理解し身体化させていく試みとしては、表驚科という科目の特性に最もフィットした方法だと思います。児童には、役割を切り替えてやるのか、統合してやるのか、どちらかのタイプが自分がやりやすいかなどを考えさせる。

担任の先生と課題を共有して進めることで、単純にあらわれだけを見るのではなく、子どもたち一人ひとりの内的な努力にも目を向けることができた。これは他の学年でも感じることであり、鹿野学園での学校を挙げての継続的な取り組みの大きな成果である。

2020/6/11	演劇WS「のっかってみよう！」
2020/6/12	振り返りビデオ＋省察＋発表
2020/6/25	演劇WS「みんなで作る／みんなが幸せ」
2020/6/26	振り返りビデオ＋省察＋発表
2020/12/7	演劇WS「絵を起点に。～じっくり力。他の人のことを想像してみよう」
2020/12/8	省察＋発表
2021/1/21	演劇WS「自分が監督、自分が主役」
2021/1/22	省察＋撮影



〈6年生〉メイン講師＝齊藤

6年生から9年生までが学ぶ王舎城学舎。ワークショップも5年生までとは一味ちがっていく。

7月は、一人の人間の中にも様々な性格が同居しており反する意見を頭の中で戦わせているのではない、という仮説のもと、脳内の人物たちに性格づけをして、演じてもらった。先生による省察回は、校内研究授業。打ち合わせを受け、前日の他グループ作品を各iPadに用意。他グループのよいところやアドバイスを記入し、交換しあって、自分たちの良さを意識して活用できるよう進行された。

12月2月は言葉の通じない「ヤギ」にどうやって伝えるか！？という内容。グループワークは、「いいね！」とどんだんのかかるチーム、「いや、それでは伝わらない、あーでもない、こーでもない」と真剣に吟味するチーム、多様な形の関わり合いが見られた。先生による省察はアットホームな雰囲気、生徒たちも発言しやすいよう。「ニコニコ」という学級目標どおり、仲の良さが印象に残った。

一方、少人数だとなんでもわかりあっているからなかなかコミュニケーションが活性化しない、と一般的に言われる。そこで、1月の3人組活動では、先生があえて普段目にしない組み合わせを用意。すると「遠慮」が効いていたのか、コミュニケーションが活性化され、それぞれの話し合いが新鮮な関わりで運んでいく様が見られた。

6年生では、話し合い（特に相手の意見を汲み取ること）が上手くいったかどうか、成果物に大きな影響を与え、身をもって“良い話し合い”を考える機会となっていた。6～9年生のWSを組み立てる上

で、6年生は「話し合い」、7年生で「逸脱」、8年生で「ロジカルシンキング」、9年生で集大成、というテーマ設定のイメージが見えてきた。

2020/7/9	演劇 WS「脳内会議 by 日影劇団」
2020/7/10	振り返りビデオ+省察+発表
2020/12/17	演劇 WS「ヤギ博士！」
2020/12/18	省察+発表
2021/1/14	演劇 WS「見立てて、演じてみよう！」
2021/1/15	省察+発表



〈7年生〉メイン講師＝齊藤（演劇）／藤田善宏（ダンス★）／望月玲奈（メディア芸術★）
重点学年。演劇、メディア芸術の表現ワークショップは2回ずつ、ダンスを1回行う。

演劇 WS では、6月に制約の中での台本づくり、7月に即興でイメージを共有して体現する活動を行った。少々ハードルが高くて、トリジユク経験の長い7年生たちは話し合いがうまく、共感や応答の声が自然に出ていて、もめても自分たちで納得解を見つけていく。発表へのモチベーションも高く、マスクを着けているので声が通らない場面では、「もっと大きい声で言って」と見る側の生徒たちからリクエストが出ていた。お互いを理解し許容することを自然に体現しており、話し合いの進行は非常にスムーズ。誰かが強引に進めようとする場面でも、落ち着いてその人の意見を汲み取ろうとしている。内容の理解力、話し合って考えをまとめる力、発展させ楽しむ力にますます磨きがかかった印象。

ダンス WS では、1回目から人間関係の安定、自分たちで考えることの習慣化、他者理解が進んでいる様が見られた。講師と教員の打ち合わせを経て、翌日の省察では「ダンスを文化祭演目にしよう」と教員が提案。初めは「1回しか体験してないのに無理！」という生徒もいたが、グループワークになると持ち前の自主性が発揮され、活発に話し合っていた。約1ヶ月の間に、各グループが、構成、音源探し、動きや小道具も使って、オリジナルダンスをつくりあげ文化祭で披露した。

メディア表現 WS では、作品へのこだわりもあり、しっかり話し合っ動き出す特性が見られた。一方、合意形成できないと動き出さない、という側面も見られたため、12月にはあえて、否定せずののっかっていくルールを設け、「とりあえずやってみる！」という体験を通して、やりながら学ぶ力をつけていった。翌日には、少人数でなく全員での作品製作にも挑戦し、全員が関わりあいながら、時間内に2本の作品を完成させるという、マネジメント力も発揮していた。

2020/6/1	演劇 WS「ちょっとだけお芝居の台本を書いてみよう」
2020/6/2	振り返りビデオ+省察+発表
2020/7/1	演劇 WS「みんなで一つの風景 ～加米良萬先生からのお願い」
2020/7/2	振り返りビデオ+省察+発表
2020/9/29	ダンス WS★「オリジナルダンスをつくってみよう！」
2020/9/30	振り返りビデオ+省察+もっとやってみる
2020/11/5	メディア表現 WS★「逆転時間」
2020/11/6	振り返りビデオ+省察+もっとやってみる
2020/12/2	メディア表現 WS★「ドリコマ」
2020/12/3	振り返りビデオ+省察+もっとやってみる



〈8年生〉メイン講師＝齊藤

6月のWSでは女子のリーダーシップと元気の良さが際立ち、男女間のコミュニケーションギャップが起りがちだったが、なんとか形にしていた。2日目の省察では、先生の「あいづち」のお話があったあと「話しやすい環境づくり」について意識する様子も見られ、その後の活動が活発化していた。

12月の内容は、9年生で行う「表鷲の巣立ち式」（偉人の言葉を引用して自分の志を語るという学校行事）を見据えて用意。グループの中に鳥劇が進行として入ることをせず、台本、配役、音響など決めるにはいけない内容も多く設定しており、「挑戦」のワークショップだった。先生による省察で「難しいけど君たちならやれる」と言葉を受け、その後の活動では、勢いよく話し合い、リハーサルにとりかかっていた。発表では恥ずかしさと戦いながらも自分の殻を破ろうと挑戦している姿が見られ、見守る我々大人達の応援も熱が入っていった。

独創的な考え、自分なりの世界観を持っではいるものの、話し合いに苦労したり（特に男女間）、発表の際の発語や表現も小さかったりと、なかなか自分の殻を破れずにいる印象が強かった。しかし、最後には吹っ切れ、活発な話し合いを経て独創的な作品を創り出し、堂々と発表をこなしていた。

思春期まっただ中の8年生に向けて、思い切った授業が実現できたのは、先生との入念な打ち合わせがあったからこそである。齊藤と担当の先生のワークショップ連携は4年目になるため、互いを信頼した上で率直に感想やアイデアを出し合い、毎回前向きな雰囲気で行われていた。

一方、教員によっては「打ち合わせが負担」と感じる場合もある。打ち合わせ時間は長引かせずに、協働して授業をつくっていくことの面白さや有効性を示せるようにしていきたい。

2020/6/8	演劇WS「桃太郎にツッコミを入れよう！」
2020/6/9	振り返りビデオ+省察+発表
2020/12/7	演劇WS「カタルタ情熱大陸」
2020/12/8	省察+もっとやってみる



〈9年生〉メイン講師＝齊藤（演劇）／望月玲奈（メディア芸術）

9年生が毎秋に行う「表鷲の巣立ち式」を見据え、6月のWSは、人物の名言を使ってプレゼンする活動。柔軟に思考し、他者の考えとすり合わせ、名言・格言への構えを取り除き、より効果的なプレゼンテーションを考えていく。2日目には、恥ずかしさを取っ払って人前で何かをやって見せる姿、そして観客が自然と拍手や歌で参加してしまう場面もあり、何もかもが「この場に立ち会えてよかった！」と思わせるものだった。全体的に、個々人の特性を活かしあう姿が多く見られ、昨年からクラスの雰囲気も大きく変わったように感じられた。先生が普段から、最上学年としての彼らへの声かけや関係づくりを工夫されているからこそ、進化した彼らと出会えたのだと思う。昨年度、最後に見たときからは想像もつかないほどの成長を感じた。数ヶ月の間に最上学年としても自覚が芽生えたのだろう。みんなで積極的に話し合い、目の前の課題に楽しみながら取り組んでいた。最後のグループ発表作品もそれぞれに工夫を凝らした作品になっていて感心させられた。

10月のメディア芸術WSでは、アプリ説明も早々に「撮影時間50分」でグループ製作。話し合い、撮影、編集、アフレコまで、時間のマネジメントも自分たちで行う姿が本当に頼もしかった。

「上質な作品＝〈無理がない、すごくわかりやすい、みんなが楽しくやっている〉ということをして全ての作品を見て感じた。その原動力を、このクラスは何か持っている。みなさんにとっては毎日それが当たり前のことだからわからないかもしれないが、外から来た人間はすごく感じる。これはとても貴重なことなんです。大事なものをみなさんは持っている。」という苅宿教授からの言葉を、9年生たちは真剣なまなざしで見つめていた。卒業して離れても、困難が訪れても、これらの思い出や劇場の存在が、彼らの拠り所の一つになっていれば幸いである。

2020/6/29	演劇WS「カタルタ情熱大陸」
2020/6/30	振り返りビデオ+省察+発表
2020/10/7	メディア芸術WS「王舎城学舎での思い出をテーマに、アプリを使った作品をつくろう！」
2020/10/8	振り返りビデオ+省察+発表



○青谷高校

グループをランダムに設定しても、排他的でなく他者を受け入れるなごやかな雰囲気がある一方、社会に出る直前の学年ということで自己肯定感の低さが課題だった。日常の授業では落ち着きがなく、注意されがちな生徒も、ワークショップでは、講師や教員や他の生徒から認められる場面が多く、生き生きと活動する様子が見られた。普段は交わることのないグループで活動することも新鮮だったようで、それぞれが調整しながら関わり合っていた。3回のWSを通じて「いろんな人と関わる力」をさらに伸ばし、「他者のイメージを理解する力」「演じてみる力」を身に付けていった。

担当教員との連携を深められたことも大きい。省察活動への関心が高まり、来年度に向けて「もっといっしょに授業を組み立てていきたい」と声を上げられ、打ち合わせ時間を確保できないか学校に要望されるそう。鳥の劇場による体験活動を、教員による省察活動で意味付けしていく、という理想形に一歩近づくことができた。

2020/5/27	演劇WS「お互いのことを楽しく知り合おう！」
2020/6/10	振り返りビデオ+演劇WS「体を使って伝えよう！」
2020/6/17	振り返りビデオ+演劇WS「新チームで新しいことに挑戦しよう！」
2020/7/8	振り返りビデオ+演劇WS「ドリコマ！（１）」
2020/7/15	振り返りビデオ+演劇WS「ドリコマ！（２）オリジナル作品をつくろう！」
2020/11/18	振り返りビデオ+演劇WS「ちょっとだけ台本を書いてみよう」
2020/12/2	振り返りビデオ+演劇WS「台本をつくって、演じてみよう！」
2020/12/16	★振り返りビデオ+演劇WS「思い出劇アルバム（１）〈思い出を劇にしよう〉」
2021/1/13	★振り返りビデオ+美術WS「思い出劇アルバム（２）〈メインビジュアルをつくろう〉」
2021/1/20	★振り返りビデオ+演劇WS「思い出劇アルバム（３）〈上演しよう〉」



○逢坂小学校

11月の学習発表会「全校表現劇」に向けてのワークショップ。校長先生が「学びなくして活動なし」と言われるように、劇の練習ではなく、子どもたちが台本をつくっていく〈過程〉をトリジュークとして位置付ける。5・6年生が対象。鳥の劇場が子どもたちの発想を広げ、担当教員が子どもたちの動きやアイデアを元に整形していった。10月のワークショップでは、これから劇の練習が本格化することに向けて、5・6年生がイメージをもって引っ張っていけるよう、つなぎとなる活動を心がけた。5・6年生が各場面のイメージや班活動のめあてを、自分の言葉で下級生へ伝え、劇練習を進行していった。台本づくりを通して「伝えるためにどうすればいいか」を考える力がついてきており、恥ずかしさも克服し、大きな動作や声、セリフのスピードの工夫が見られた。

2020/5/21	演劇WS「〈全身で〉人に伝えてみよう！」
2020/7/27	演劇WS「自分たちで台本をつくってみよう（１）」
2020/7/29	演劇WS「自分たちで台本をつくってみよう（２）」
2020/10/20	演劇WS「劇づくりをはじめよう！」

